松本清張全集 7

松本清張全集 7

文藝春秋

松本清張全集7 別冊黒い画集・ミステリーの系譜

定価 1400円

1972年8月20日第1刷　1978年4月15日第4刷

著者　© 松本清張

発行者　樫原雅春

発行所　株式会社 文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町3

電話(代表)03—265・1211

印刷所　凸版印刷株式会社

落丁乱丁はお取替えします

別冊黒い画集　3
ミステリーの系譜　327
解説　荒　松雄　462

装 幀　伊 藤 憲 治

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

別冊黒い画集

事故　5
熱い空気　98
形　172
陸行水行　201
寝敷き　238
断線　261

事故

1

高田京太郎は、或る朝、寝床の中で朝刊を開いていたとき、

「あ、やってる」

と声を出した。

高田は、新聞が来ると、まっさきに社会面を開く。これは、普通の新聞読者が興味本位に社会面を見る心理とは少し違って、彼の場合は職業的なものからだ。

高田京太郎は、協成貨物株式会社総務課車輛係である。協成貨物はトラック十数台を持っている運送業で、この中には東京・松本間の長距離運送も含まれている。

高田は三十七歳で、前に保険の外交員をしていたのだが、六年前に現在の会社に替った。

高田の職業的意識というのは、彼が自動車会社の総務課車輛係ということからで、この係は自動車事故の処理を専任としている。

「トラック重役宅に侵入」

というのが高田の眼を奪った見出しだった。

「二月十一日午前零時二〇分ごろ、杉並区R町××番地会社重役山西省三さん（四二）方に突然深夜運送のトラックが突入し、同家の門を破り、五メートル離れた玄関先まで突進して停止した。そのため玄関内はメチャメチャとなった。このトラックの運転手は千代田区神田××町協成貨物株式会社の山宮健次（二一）で、路面が凍ったためのスリップと、居眠り運転による二重事故という珍しいもの。同家には負傷者はなかったが、山宮運転手は全治三日間の打撲傷」

高田京太郎は、読み終って、

「しようがねえな」

と舌打ちした。

彼が毎朝の社会面をまっ先に開くのは、こういう事故が自分の会社関係にありはしないかという気持からだ。ここのところしばらく大きな事故が無かった。

尤も、この記事から推察すると、それほど大きな事故ではない。三カ月前に、同じ深夜トラックが老婆を轢き殺し、その善後策に汗をかいて随分と奔走したものだが、今度は他家の門と玄関先を壊した程度で済んでいるようである。

女房が起しに来て朝飯の膳についたが、高田は、これを見ろ、と云って女房に新聞記事を突きつけた。

「まあ、危ないことだわね」

と、女房は味噌汁の椀を片手に持ち新聞から眼をあげた。

「昨夜は冷えたから杉並のほうは凍ったでしょうが、居眠り運転というのはどういうわけでしょうか。神田の社を出てから間もなくでしょ？」

「そうだ。若い奴は仕方がない。非番の昼間の時間でも野球に行ったり、映画を見たりして遊ぶからな、疲れるんだ。それに、いつもは二人乗るんだが、昨夜は何かの都合で山宮一人だったらしいな」

「でも、全治三日ぐらいの負傷でよかったわ。あんた、この運転手を知ってるの？」

「ああ知ってるよ」

山宮健次は日ごろから、おっちょこちょいなところがある。運転の技術は正確だが、人間がちょっと軽い。負傷が頭の疵でなければいいがと思ったのは、この青年がいつも散髪屋にばかり行っている、しゃれ者だからである。

「それにしてもおかしいわね」

と女房が云った。

「このトラックは神田から甲府、松本通いでしょ。そうすると、甲州街道のはずだけれども、この記事にある町の通りは、ちょっとそこからズレているんじゃない？」

「ちょいとそれを見せてくれ」

高田は女房の手から新聞を取戻して被害者の住所を読んだが、なるほど、この地名は甲州街道沿いではない。

「変だな」

彼は黒革の鞄を女房に持ってこさせて、中から東京都の区分地図を取出した。

杉並のところを開き、新聞の住所と照合してみると、甲州街道からまるきり離れた所でもないが、少し横にズレている。すなわち、甲州街道から岐れた路が斜め南に走っているが、問題の家はその道の途中であるらしい。

「どうしてこんな所へ来たんだろうな？」

と彼も首をかしげた。

「だって、そこに居眠りと書いてあるでしょ。寝呆けて運転を間違えたのかもしれないわ」

女房は味噌汁椀の中を箸で掻きまぜていった。

「とにかく、これで見ると、落度は完全にウチのほうにあるな。やれやれ、厄介な仕事がまた一つ出来た」

と高田京太郎は嘆息をしてみせたが、これは悪い気持で溜息をついたのではなかった。つまり、これからがおれの腕の見せどころだという誇示が、こんなわざとらしい身ぶりになったのだ。

その辺のところは女房もよく心得ていて、

「まあ、まあ、仕方がないわね。それがあんたの役目だから。やっぱりほかの人では駄目でしょう」

と嗾けた。

高田京太郎は、以前保険の勧誘をしていただけに、口のほうは至極滑らかである。弁舌爽かになんのかんのと相手をまるめこんだり、ときには軽く威かしたりして弁償金を負けさせて来るので、会社では重宝がられている。それを

高田は家に帰っていちいち自慢げに女房に告げるのであった。

高田京太郎は、神田の会社に出て事務所に入る前に、じろりと車庫を見た。そこにはトラックが三台入っていて、運転手がホースで車体の水洗いをしている最中だった。

「山宮はどうした」

と彼はその中の一人に声をかけた。

「山宮かね」

と一人が振返った。

「奴は今、R署に呼び出されているよ」

「傷のほうは大丈夫なのか？」

「なに、大したことはなかったよ、擦過傷だ。腕を少しすり剝いただけでね。胸のほうは奴も用心したとみえて、ちっとも打っていない」

「今朝の新聞には全治三日間と書いてあったがな」

「新聞は大げさだからな」

「車は？」

「これだよ」

と、その隣でタイヤを洗っていた男が捩り鉢巻の顔を振向けた。

高田はその前に行って仔細げに前部を中腰になってのぞきながら、

「どこか痛んでるのかい？」

「いや、大したことはねえ。ちょっとバンパーが曲ってる程度だ。……なに、こんな大きなトラックだもの、チャチな家の一軒ぐらい潰しても、装甲車みたいになんともねえよ。それに、荷物は山藤商会の電機部品だからな、重量は申し分ねえ」

高田は、それだけ見極めたうえ事務所に入った。

お早う、と云い交したのが先に出勤している四、五人だった。尤も車輛係は高田京太郎一人だ。

「高田さん、また仕事が出来たね」

と新聞を読んでいた者が笑いかけてきた。

「しようがないですな。また、当分、ひっかかりそうですよ。……まあ、山宮が大した怪我もなかったのは、よかったですがね」

彼は茶を一ぱい喫み、

「どれ、これから先方の家に行って謝って来ましょう。こういうことは早いほうがいいからね」

彼は、つづいて出勤してきた会計係に頼んで、千円札二枚を貰い、事務所を出た。この金で果物籠など調えるつもりだった。

車庫の前を通るとき、彼は、ふと、また足を運転手たちのほうに向けて、

「おい、山宮は甲州街道を行くのに、どうしてあんな所を通ったんだい？」

と訊いた。

車体のうしろにかくれていた男が顔をつき出して、
「さあ、分らねえな。あの路は甲州街道のカーブから真直ぐに伸びた路だがね。路幅も違うし、間違いようのねえはずだが、山宮は居眠りしていたというから、気づかずにそっちのほうへ入ったんだろう」
と推測を述べた。今朝、女房が云ったことと同じである。
高田京太郎は国電に乗り、新宿でいったん降りて、有名なフルーツパーラーで果物籠を買った。中は安ものにしても数多くし、見かけだけを立派に整えさせ、タクシーで甲州街道を走った。
問題のカーブの場所にくる。なるほど、そこからは直線に別な路が岐れているが、路幅の狭さは、現にその入口に一方通行の標識が出ていることでも分る。
「ここでいい」
と、家並みを順々に見て彼はそこで降りた。
表札を見るまでもなく、門が倒壊しているのですぐに分る。のみならず、近所の人らしいのが五、六人、その前に集っていたり、内でも三、四人が壊れた物を取片付けたりしていた。
高田京太郎は恐縮した姿勢になり、果物籠を小脇に持ち抱えて、靴音を忍ばせながら壊れた門を入った。
そこにいる近所の人に、この家の奥さんを訊くと、その人はすぐに奥に駆けこんだ。
玄関に行くと、これまた格子戸も、上り框も壊れているが、幸い、そこで車はストップしたらしく、内はなんのことはなかった。
彼は、この家の妻女が出て来るまでに素早くあたりを見回して、ざっと損害の計算をした。家は古い。構えはかなり大きいが、昔風のもので、建ててから二十年以上とみた。つまり、戦前のものだ。この辺は戦災に遭っていないのである。
門はいわゆる冠木門だが、木が古いので、少し強い風が吹いても倒れそうなシロモノである。現に柱も門扉も風雨に曝されて黒くなり、虫喰いのところさえある。だから、折れ口だけが生白く浮き立っていた。
玄関も同様で、格子戸と上り框を壊したくらいだから、全部を修繕しても、門と両方でざっと一万五千円もあれば十分だろう。それに見舞金として五千円、計二万円と彼は踏んだ。
さりげない風で見回した首を元に戻したとき、正面に三十一、二くらいの婦人が膝をついていた。
色の白い、ふくよかな顔だちで、髪も豊かである。かなり美人といってもいい。真白いエプロン姿は片付けごとの最中とみえた。
「これはどうも」
と高田京太郎は恭々しくお辞儀をした。
「わたくしは協成貨物株式会社の総務課の者でございますが」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

こういう場合、彼は決して車輛係までは付けない。
「昨夜は、わたくしのほうの若い者がとんだ粗相をいたしまして、たいへんご迷惑をおかけいたしました。とりあえず今朝は何をおいてもお詫びに上ったような次第でございます」
彼は抱えていた果物籠をさも重そうに隅に残っている式台の上に載せた。
それからおもむろに名刺を差出し、
「奥さんでいらっしゃいますか？」
と揉み手をして訊いた。
「はい」
主婦は少し眩しげに眼を伏せた。こちらの挨拶に少々どぎまぎしている様子だった。ははあ、この奥さん、あまり世間に馴れていないな、と思うと高田は好感を持ち、同時にこれは安上りでゆけるかもしれないと思った。
主婦は、真白いエプロンの衿にハイカラな意匠のセーターをのぞかせている。色は萌黄で、それが白いエプロンと対照的に、若草のように映えている感じだった。
高田京太郎が社の事務所の前まで戻ると、恰度、向うから、頸から下げた繃帯で手を吊った、当の運転手の山宮健次が歩いて来るのと出遇った。
「よう」
と彼から声をかけた。
「どうしたい？　えらいことをやったじゃないか」
こういうとき、高田は年の若い運転手でも決してがみがみ云わなかった。叱言をいう権利もないが、どことなく、おれはお前たちのためにむずかしい交渉に骨を折っているんだぞ、というところを顕す。それをあらわに出さないで、柔らかく相手に見せるのが彼の巧いところだった。
つまり、それによって運転手たちの人望が集るのを狙っている。
「すみません」
と山宮は頭を下げた。
顔を見ると、それほど痛そうでもなく、血色もよかった。
「どうだ、傷のほうは？」
「はい、大したことはないです」
山宮は年が若いから言葉遣いも丁寧だ。
「R署に呼ばれたんだって？」
「はあ。いま、その帰りです。事情を聴かれた上、免許証を取上げられました。正式な処罰が決まるまで預っておくというんです」
「うむ。いま運転手の払底しているときに、君のような腕のいいのが休むとなると、会社もことだな」
「はあ、すみません」
「居眠り運転だというじゃないか？」
「はあ。自分ではそのつもりではなかったんですが、はっと気がついてみると、えらい路に入っているんです。それ

であわててブレーキをかけようとしたら、それがいけなくて、かえってスリップしてあの家に飛びこんじゃったんです」
「ブレーキをかけたからよかったんだな。でなかったら、あの古い家は奥までメチャメチャになってるよ」
「高田さんは、あの家に行って来たんですか」
「ああ。今ね、とりあえずお見舞に駆けつけた」
「どうも」
と彼は頭をぺこりと下げた。
「いや。それよりも、君の傷のほうが軽く済んでよかったよ」
「先方の人は怒っていましたか？」
「奥さんが出て来てね、なかなかおとなしい人で、こちらも安心したよ」
「そうですか」
山宮が、そうですか、と云ったとき、ちょっと唇の端を笑わせた。高田はそれを見て、彼も安堵したのだと思った。
「主人は会社に行って留守だったが、奥さんがあの調子なら、そう無理も云ってこないだろう。明日でも君もぼくと一緒に謝りに行って貰いたいんだが、そうすると先方の心証がずっとよくなるからね」
「そうします」
と山宮はうつむいて云った。伏せた睫毛にまだ稚い名残りがあった。
「まあ、事故を起したんだから仕方がない。今夜はゆっくり帰って静養しろよ。……あ、それから、課長さんには挨拶して来たかい？」
「はあ、して来ました。……さようなら」
山宮は繃帯を吊った頭を下げると、向うへ歩いて行った。
高田京太郎は事務所に戻った。まず、大きな湯呑に熱い茶を汲み、それを啜って、ちょいと課長席のほうを見ると、折から来客があって、課長はしきりとその人と話しこんでいる。
課長にはどういうふうに報告しようか。こちらは二万円で手を打たせるつもりだが、課長には三万円以上に云っておかないと、はじめから枠を決めたのでは手柄にならない。三万円以上だと云っておいて二万円にすれば、こっちの手腕が評価されるというものだ。
その胸算用が終ったころ、客が帰ったので、高田は課長席の前に進んだ。
「山宮の事故のことですが……」
「ああ。早速、先方に行ってくれたそうだね」
課長は接待煙草を一本口に咬えた。
「はい。早いほうがいいと思って、果物籠を見舞品に、とりあえず挨拶して来ました」
「ご苦労。で、どんなふうだ？」
「主人は平和化繊という会社の監査役でございます。恰度、主人は出勤したあとでしたが、奥さんにお会いすると、そ

れほど気むずかしい人ではなさそうなので、ほっとしました」
「なるほど」
「それから、壊れた門や玄関先をざっと見せてもらいましたが、家はかなり古うございます。だが、修繕代は、いま大工の手間賃その他が騰っていますので、大体、三万円以上かかると思います。それに、詫料といいますか、見舞金として一万円をつけ、都合四万ちょっとぐらいでカタが付きそうです」
「そのくらいで大丈夫かね？」
と課長は安過ぎるという顔をした。
「はあ。なんとかこの線でまとめてみたいと思います」
「頼むよ」
高田は引退ったが、四万円くらいでも課長が安過ぎる顔をしているのだから、これは仕事がしやすいと思った。
このとき、向うのほうで電話を聞いていた男が、高田さん、と呼び、
「どうやら、今朝の事故の被害者の宅から電話のようですよ」
と取次いだ。
高田が出ると、受話器から流れる女の声は澄んできれいだった。
「こちらは山西ですが……」
「あ、奥さまですか。私はさきほどお邪魔をした高田でございます」
彼はセーターの萌黄色がよく似合う色の白い細君の顔を眼の前に漂わせた。
「あら。どうも……あの、お願いなんですけれど。事故は仕方がありませんから、あまり運転手さんを責めないでいただきたいんですけれど……」

2

高田京太郎は、山西省三の妻の電話を聞いたあと、ゆっくりと煙草を吸った。
近ごろ珍しい話である。
事故係としての彼は、始終トラックの被害を受けた家を回っている。どこでもまるで罪人のような扱いだった。そんな場合、彼は、最初、ひたすら低頭して聞いていなければならなかった。
はじめから抵抗すると、結局、交渉ごとがもつれて弁償が高いものにつくからだ。なるべく紛争をスピーディに片づけるのが会社に対しての手柄である。事を構えて先方と告訴沙汰に発展するような不手際は、彼の最も避けるところだった。安い補償で、早いとこ決めなければならぬ。
対手は、絶対といっていいくらい、実際の被害額の三倍ぐらいの補償を要求する。この辺から彼の腕の振いどころだが、まず、対手の激情が落着くまでは、決してこちらから衝突しない。なかには事故を起した運転手を、ここに呼

んで来い、殴らないと気がすまぬ、などと居丈高になる人間もいた。

そういう人が多いなかで、わざわざ先方から電話をかけてきて、

「事故は仕方がありませんから、あまり運転手さんを責めないで下さい」

と頼むのは、稀有の美談だといっていい。あの事故はどう考えても運転手に弁解の余地のないものだった。走るべきコースを逸れて別な道に入り、門と玄関を破ったのだ。しかも午前零時という深夜だから、どんなに文句を云われても仕方のないところだ。

高田は恐縮して、その電話に礼を云ったが、この分だと損害賠償のほうも簡単にゆきそうである。

奇特な人もいるものだと思って、その電話の次第を横にいる者に早速伝えた。ほかの者もそれは珍しいと云った顔をしたが、

「もしかすると、はじめはそんな下手に出て、賠償金のほうはガメツイところをみせるんじゃないかな」

と慎重論を云う者もいる。

しかし、高田には、さっき会った妻女の印象からそうは思われなかった。色白の奥さんの顔が萌黄色のセーターと一緒に浮び上ってくる。まだ世間馴れがしてなくて、こちらが丁寧に謝るのに、ちょっと眼のやり場がないといった様子で困っていた。

ただし、奥さんのほうはあれでいいが、問題は旦那のほうだった。重役というから小理屈をこねかねない。まだ見たことはないが、あの奥さんの亭主ならかえって気難しい男のように思える。

電話では奥さんは金のことには少しも触れなかった。ただ、運転手をあまり叱ってくれるな、と云っただけだ。

高田はそれが気持にひっかからないでもなかった。なぜ、そんなに運転手のことを気遣うのだろうか。

高田は、運転手の山宮が当世の言葉でいう、ちょっとイカス男なので、あの奥さんが彼に好意を持ったかもしれないと思った。山宮は二十一歳だが、顔のどこかに少年の稚さを残している。

奥さんはおとなしいようだけど、三十一、二歳くらいだ。とかく、年下の男に同情を持ちたがる年齢だ。

高田はそんなことを考えていたが、口には出さなかった。ほかの者も、こんな小さな事故のことをいつまでも話題にしていない。お互い忙しい仕事を持っている。

高田は、あの山西家を出るとき、ご主人が帰られてから、損害賠償、その他のお話に伺いますと云ったが、奥さんは主人の帰りは遅いので、明日の朝早く来てくれと指定した。

――それから二時間ぐらい経って、当の山西の主人から電話が掛かってきた。ほかの者が取り次いだので、高田はすぐ代った。

「あなたが事故のほうの係ですか？」
と渋くて、太い声だった。
「はあ、さようでございます。高田と申します。この度はどうも……」
「高田さんとおっしゃると、わたしの留守にウチに見えた方ですね？」
「はい。早速お詫びに上った者でございます」
察するに、あの奥さんは電話を会社に掛けて、主人に高田のことを伝えたらしい。
「ぼくは昨夜は出張していて、まだ家に帰っていないので見ていませんがね、相当、大きくやられたらしいですな」
高田は、おや、と思った。
この主人は、昨夜は出張で留守をしていたという。奥さんに会ったとき、主人は出勤したあとだと云っていたが、出張の意味だったのか。主人が、まだ家の被害を見ていないというのは、今朝、出張から帰ってそのまま真直ぐに会社に行ったからだろう。
「はい。まことに申し訳ございません。しかし、お帰りになってごらんになると分りますが、ご門と玄関先を壊した程度で、それほど大きな壊れ方ではないと思っておりますが」
早速、駈引がはじまった。
「そうかね」
と相手は疑わしげだった。

「家内からの報らせでは、門も玄関も滅茶滅茶だそうだが……」
しかし、それは建物自体が古いからだと云おうとしたが、電話では、とかく感情を刺戟しやすいので、高田は今はそれに触れなかった。

高田京太郎は、夕方の六時ごろに杉並の山西宅に向った。主人は六時半ごろに家に来てくれという。奥さんの言葉とは変っている。
行ってみると、門は壊れたままだが、玄関だけは応急の処置をして、雨戸などを立てならべ、縄で括りつけている。高田は横手の出入口から声をかけた。
「たびたびご苦労さま」
と、奥さんが出て来た。
「どうも、こんな所から」
と彼女のほうで恐縮していた。玄関から入れなくなったのは、高田の会社の責任である。
わりと広い家だった。長い廊下を歩いて突き当りのドアを開けると、そこが洋風の応接間になっている。古い建物なので旧式な感じながら、気持のいい飾りつけがしてあった。
クッションに掛けていると、奥さんが茶を持って入って来た。今朝見た萌黄のセーターでなく、今度は着物だった。これもよく似合っていた。

「どうも、ありがとう存じます」
と、出された茶碗にお辞儀をした。
「いろいろと、ご迷惑ですわね」
と、奥さんはどこまでも丁寧だった。
「いいえ、こちらこそ申し訳ございません。……それに、さきほどはご丁寧なお電話を頂いたりして、ますます恐縮しております」
「いいえ。……でも、運転手さんだって、わざとあんな事故を起したのではないんですから、あんまり会社のほうでお叱りになると気の毒だと思いまして」
「はあ、ありがとうございます。それは課長によく伝えました」
「あの、お怪我のほうはどうですか？」
「はい。こちらの帰りに運転手……山宮という男ですが、彼に遇いましたところ、大したことはないそうです。三日も治療すれば癒るとか医者に云われたそうでございます」
「それは思ったより軽くて結構でした」
そんな話の途中にドアの把手が微かに鳴ったので、奥さんは急いでそこから離れた。途端にドアが開いて、でっぷりとした四十前後の男が入って来た。
高田は勢いよく椅子から起ち上がった。
主人というのは、やや頭髪がうすれかかっているが、立派な顔立ちをしている。頸が太く、腹が少し突き出ていた。いかにも会社の重役といった貫禄が窺われる。
和服の山西省三はゆっくりと椅子に掛けて、片手に煙草をくゆらせながら、高田に対った。眉が濃くて、唇が厚い。
「帰って見ておどろきましたよ。家内の電話で想像した以上にひどかったですな」
言葉はゆったりとしているし、微笑も眼もとに漂っていたが、賠償のほうは一歩も退けぬといった気構えが感じられた。
「なんとも申し訳ございません。帰って運転手に訊きますと、ちょっと疲れていて錯覚を起し、間違った路を入り、泡を喰ったところをスリップしたそうで……」
「なるほどね。ぼくも昨夜は出張でよそに行っていて、今朝会社に出ると、いきなり社の者からお見舞を云われておどろいたんですがね。朝刊の記事もそのとき見せられましたよ。……居眠り運転としてあったが、事実、そうなんですか？」
「はあ、どうも……」
事実だから、これは弁解しようがなかった。
「ぼくもすぐに家へ電話しようと思った矢先に家内から掛かって来て、損害の程度を聞かされました。だが、実際見て意外に大きいのにおどろきましたよ」
「まことに申し訳ございません。それで、早速、破壊した部分の修理はわたしのほうで全面的に受持たせていただいても結構ですし、お宅のほうでお出入りの大工さんでもあれば、そのぶんだけの費用を現金にして差上げてもよろし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com